心理学実験最終レポート課題

5122020　平原拳誠

実験課題について

　私が一年間の心理学実験を通して印象に残っている、社会的知覚の実験について取り上げる。まず社会的知覚とは人が人の印象形成をする事であり、本実験課題ではその社会的知覚に動物が与える影響を調べた。実験の背景にあるものとして動物の社会的潤滑油効果が存在する。つまり、他人を印象付けるときに動物がいるといないとで認知の変容は起こるのか実験を通して確認した。

　この実験結果を整理するにあたってはSD法を用いた。SD法とは対立する形容詞対を用いて5段階の尺度で回答を求める方法である。今回は形容詞対を10個選んだ。①不健康な―健康な、②知的な―知的でない、③弱い―強い、④勤勉な―怠惰な、⑤信頼できる―信頼できない、⑥とげのある―寛大な、⑦不満な―満足な、⑧大胆な―臆病な、⑨心地よいー不快な、⑩裕福な―みすぼらしい、の１0個である。動物がいる場面・いない場面が描かれた絵を３組選択して、絵に描かれている人の印象は動物の有無でどう変化するのかを被験者5名に対してSD法を用いて確認した。最もネガティブな意見を１、最もポジティブな意見を5とし各結果を数値化した。そのあと形容詞対ごとに結果の平均点を出し、集計表を使い整理した。そのあとSD法独自の方法である、プロファイル図を作成した。作成方法としては、まず評定用紙の形容詞対をもとに左側の枠にネガティブな形容詞を、右側の枠にポジティブな形容詞を記入し、形容詞対ごとに各尺度上に平均点をプロットで結ぶ。これを図ごとの区別がつくように６種類のグラフを作成した。

　結果として動物がいない図の3つは形容詞ごとに見るとすべて3を下回っていた。これにより被験者は動物がいない図に対してネガティブな印象を持っていることが分かった。特に③「弱い―強い」の形容詞対の項目が一番低く、被験者全員が１または２を選んでいた。また動物がいる図に対してはすべて３を超えていたので、被験者はポジティブな印象を持っていたことが明らかになった。特に①「不健康な―健康な」の形容詞対の項目が一番高く、被験者全員が４または５を選んでいた。

実験の考察として、動物の社会的潤滑油効果の働きにより、社会的知覚においては動物が一緒にいることで「健康」や「心地よい」などポジティブな印象を与えることがわかり、動物が一緒にいないと「不健康」や「不快な」などネガティブな印象を与えることが分かった。

自分のアイデア

　この実験から動物の存在は人の印象形成に大きく関係することが分かったが、社会生活にはどのように生かされているのか。一番に思いつくのは好感度アップのイメージ戦略だろう。有名人がSNSに動物と一緒に撮った写真を上げれば、「いいね」が付き、その人への印象がポジティブなものになっていく。企業のCMでも３B(Beauty Baby Beast)と呼ばれるほど動物を使うと注目を集め、目を引きやすく、好印象を消費者は抱くとされている。前述したイメージ戦略とは少し異なるが、カウンセリングや福祉、介護や保育など対人援助職の現場でも動物を使った印象操作ができるかもしれない。例えば保育園・幼稚園で働いている方はエプロンをしているというのを見たこともあるし、聞いたこともある。そしてそのエプロンにはフェルトで作られた動物がついていることがあり、それは幼児からの印象形成を少しでもポジティブなものにするためにつけているのではないかと考えることが出来る。またカウンセリングにおいてはクライエントとのラポール形成のために使えるかもしれない。クライエントから見たカウンセラーの印象は非常に重要であるため、待合室に動物の写真や絵を貼って「この人は動物に親しんでいる」という印象を与え、「誠実」や「信頼」などポジティブな印象をクライエントに持ってもらえる一助になるのではないかと考える。ただ、動物を使えば他人からの印象が良くなるという安易な考えは危険である。先ほど述べたカウンセリングの場面においては、そもそも今からカウンセリングを受けようとするクライエントが動物の写真に気を惹かれるような精神状態であるのかどうか、その動物の写真は本当に必要なのか考える必要がある。また介護の例で考えてみると、施設またはヘルパーさんの印象を良くするために動物を飼おうとすると、いろいろな弊害が考えられる。利用者がネコ・イヌアレルギーだったり、アレルギーを持っていなくても動物が嫌いだったりと、動物がいることによって印象が悪くなることだってあるかもしれない。そうすると動物を使うことはデメリットでしかない。

以上より、社会生活において動物による他人からの印象形成の向上はSNS・広告などに用いられており、それは心理・福祉など対人援助にも用いることが出来ると考える。しかし安易に動物を使うのではなく、動物を使うことによって生じるポジティブな効果とネガティブな効果両方を確認したうえで、動物を印象形成の一助にする必要があると私はこの実験課題を通して考えた。